牢獄からの脱出

――内省の鏡を壊す――

高橋　徹

鏡を破らなければ鏡の背後が見えないように、人間の内面も、内面の鏡を破らなければ、その背後を見ることができないのです。(1)

平均的な人間は、自分が何かの原因であり、従って、あらゆることはエゴの中心から始まって、それが外側の人生というスクリーンに映し出されると考えている。このエゴ中心の空間に住んでいる限り、見かけの変化はあり得ても、真の変化は起こりえない。真の変化とは（中略）意識の拡大の問題ではなく、むしろ、意識を打ちこわすことなのだと彼は言った。(2)

はじめに――外界とは内部の鏡に映った世界なのだろうか？

二〇二四年の三月だったと思う。『シュタイナー　悪について』という本を読んでいたら、次のような一節に出会った。

現代の私たちは、問題を通常の意識の中で解決しようとします。しかし、通常の意識から取り出せるのは、もともと外的な感覚印象から生じたものや、それを感情と意志に転化したものばかりです。通常の意識をもって内面を見ると、外的な生活の反映しか見出せないのです。（中略）現代の私たちの通常の自己認識は、変化した外界の反映にすぎません。外界が私たちの内面にある意識の鏡に映し出されているだけなのです。私たちが本当に自分の内面を見ようとするのなら、この内なる意識の鏡を破らなければならないのです。(3)

（傍線は引用者による。以下、同。）

これを読んで気づいたのは、筆者が若い頃からなじんできたメキシコのシャーマニズムでいう「内省の鏡を壊す」ことと、右記引用にある〈内なる意識の鏡を破らなければならない〉ということが、まったく同じ意味であるということだった。

詳しい説明は省くが、メキシコのシャーマニズムで大きな課題であり、初期の修行の目的あるいは達成目標のひとつが「内省の鏡を壊す」ことで、人智学の創始者シュタイナーもそれとほとんど同じ表現をしていることに、新鮮な驚きを覚えた。それだけ人間の内面＝心は、鏡に関連した機能を持っているということだろうか？

ひと言で言えば、もともとこの「鏡」は外界の印象が内部に反映したものであり、また内部に反映したものが今度は外界に映し出されるという具合に、双方向性を持っていると考えられる。繰り返すと、それは外部のものを映し込んだ鏡であると同時に外部を映し出す（投影する）鏡でもある。そして、この鏡は何らかの制限と関連している。

このような「内省の鏡」と、それを壊すことについて、筆者はもうずいぶん前から関心を持っていて、①内省

の鏡とは何か？　そして②それを壊すとはどういうことか、の理解を深めようと努力してきた。なぜなら、多くの人と同様に筆者自身がここでいう内省〔self-reflection〕の罠にはまって、その中に居続けていることにうすうす気づいていたし、まず何よりもそれが心の牢獄あるいは反射・反映のループとなって自分を閉じ込めているということに、自覚的であろうとしてきたからである。

振り返ると――今になって思うが――もう四十五年以上前からこの内省の鏡を壊そうとずっと努力してきたのだが、それが果たせずに現在に至るのだ。(4)

……こんなことを書いても、おまえはいったい何を言っているのか？　と、ちんぷんかんぷんな読者も多いかもしれない。だが、少なくとも筆者にとっては、〈この内省の鏡の罠から抜け出さない限り、何一つ自由はない〉と思うくらいに重要なことなのである。そして、ここ何十年もぼーっとした頭で、ときどきこのことを思い出しては何とか突破口を開くことはできないものかと、悶々としてきたテーマである。

そして、このシュタイナーの言葉は、それまでしっかりと読んでいなかった人智学と呼ばれるシュタイナー思想の重要性を改めて筆者に喚起させるのに十分だった。

筆者はこのシュタイナーの言葉を契機に、もう一度、「内省の鏡を壊す」ことに関して中途半端になっていた研究を再開した。それからもう二年以上が経過したが、今でもこのテーマの研究を継続している。今の自分にとって最も大切なことは何か？　この問いに対する答えが、ここにあると感じたからである。

こうした経緯を通して、現時点では以前よりは理解が深まった「内省の鏡」について、どんなことを読者の方々と共有できるだろうか？　それを以下の構成と順番でしるしたい。

【本論の構成】

はじめに――外界とは内部の鏡に映った世界なのだろうか？

一、自分の心の奥底に何があるのかを知らない、内面を失った現代人

二、なぜ奴隷のような生き方をして牢獄の中に閉じ込められているのか

三、内省の鏡を壊すことと反転

四、内省の鏡と知覚の泡

五、メキシコ・シャーマニズムにおける内省の鏡は巨大な記憶倉庫にたとえられる

六、内省の鏡ないし知覚の泡を数字の十八で表す

結びに代えて――月の十八と土星の十八はどう違うのだろうか？

一、自分の心の奥底に何があるのかを知らない、内面を失った現代人

現代人の内なる宇宙は占領され、死に絶えている

筆者は一九九〇年代の後半に、出版されてまもない『ベロボディアの輪』（角川書店、一九九七）を読んだ。著者はオルガ・カリティディというロシア人の精神科医である。この本を読んで共感はしつつも、まだ十分にその意味を咀嚼できなかった一文がある。それは「精霊の湖〔Spirit Lake〕」について語るアルタイのシャーマンの老女ウマイの次のような言葉である。